

このごろ、私は自分の幼児の時代のことを思い出してみようと努力している。いろいろな人が自分の幼児のときのことをほらしそうに、また、たしかそうに話しているのを聞くと、うらやましくもなっている。

ところが、さっぱり私は何もおぼえていないのである。数え年の五才までは、東京の赤坂にいたのであるが、何か坂みたいなの

## つたのみ日記(8)

記憶があるような気がするだけである。これも、赤坂という地名から、あとからこんなことをこじつけて考えているのかも知れない。

私がとにかく覚えていいると思っっているのは、五才六才のころ山形にいたときのことである。ここで私は幼稚園にはいったこととはたしかであるが、ほとんど何もおぼえていない。ただ、一枚の写真が戦災を受け

るまでは残っていたことをおぼえている。それは、私をふくむ三人の男の子が、めいめい三輪車の横にたっている園庭である。

私たちは、紺のかすりの着物でしまのはかまをはいていた。——いま、その写真もなくなつて二十年近くもたつと、そうおもつてはいるものの、実際に私がそのように覚えてはいるかのような気がしだしている。

私は自分が幼稚園のことと関係することになつたので、何とかしてこのころの幼稚園のことやら、そのころの自分のことを知りたいと思ひながら、じゅうぶんに果さないてはいるのである。明治四十二年前後のことである、と書きながら、感慨を禁じえない。

しかし、山形にいた二年のうち、はつきり覚えていると、いま思っていることが少しはある。父の官舎の庭はとても広くて、池があつた。あるとき私はそれにおちこんだが、そのとき黒い帯がほどけてひろがつたことをまざまざと覚えていいる。も一つ、庭に梅の樹がたくさんあつて、ふんだんに

実がなつた。それを、今から考えると、のし梅やもなかにして、お菓子屋がもつてきた情景を覚えていいる。

このことを自分では覚えていいるつもりではあるが、父母や姉から聞いた話なのかも知れない。父も、妹も、そして母もすでに早くこの世を去つてしまひ、写真の類もすべて焼けてしまつた。私の幼児時代への追憶を補充するみちはすべて絶えてしまつていいる。

山形から、父母とともに、満州の安東県に移つたが、小学校一年に入つたことははつきり覚えていいるし、その前の年の暮に、すつかり氷つた鴨緑江をそりでわたつたこともはつきり覚えていいる。そこでも、ほんの少し幼稚園に入つたはずであるが、何もおぼえていいない。

かくて、私は、閉ざされた自分の幼児像にぼんやりとかなしんでいいるのである。



坂元彦太郎